

龍南會雜誌第百三十六號

論 說

歌 道 の 變 遷

(舊稿)

蜂

嶺

國文學の精粹は散文にあらずして韻文にあり我國にては歌は神代に起源を發し後世益々盛となり

謠曲戲曲俳句等の韻文起りたれども古代の和歌は猶連綿として其盛なるを失はず歌とし云へば必ず三十一文字を指すに至れり宣長の石上私淑言に歌は神樂催馬樂今様より下りて長唄、小唄、淨瑠璃俳諧までを云ふと云へるは進歩せる考なりされど一般は三十一文字をのみ指したり

歌を品評する學は中古より起れり今講究せむとする所は即ち此の評論の歴史なり創作物の時代的研究の外其の評論につき史的研究をなすは極めて重要な問題なり之を攻究するは各時代の歌に對する理想を知り又其評論の如何なる影響を歌に與へしかを知り従つて和歌の變遷を知ることを得べし

文學批評の學問は支那にては六朝の梁に生まれり即文心彫龍(梁劉勰)其の最初のものにして詩品(梁鍾嶸)の如きも然り我國にては

濱成式

喜撰式

を和歌四式と云ふ濱成式は藤原濱成勅を奉じて作りしものにして濱成は延暦元年六十七歳にて亡せり又喜撰式は千載集の序に(宇治山の僧喜撰云々)の記事あり順徳院の八雲御抄には四式の名を擧げ 歌の七病四病の説を載せたれども今世に傳はれる四式は後人の僞作にして容易く信じ難きものあれば余は歌話に關する最も古きものを古今集の序ありとす

然れども古今集の序は歌論の體にあらず歌論の書の最も古くして確なるものは藤原公任の新撰髓腦和歌九品なりとす降りて平安朝の末より鎌倉時代に至りては歌論の書の出でしこと實に多く此等は秘傳として歌學者間に傳へられ室町時代を経て 徳川時代の初期に至れり時に復古學の勢盛にして革新者民間に起り從來の歌學は唯堂上派の一部に餘命を保つのみ此の間歌道の革新者として鎌倉以後の弊習を打破せしは戸田茂睡を推さざるべからず茂睡に次ぎ在滿以下の諸家起り各説を立てて相争へり而も景樹以後今日に至る迄從來に優る歌論なく西洋の美辭學を修むる士多きも我國固有の 美辭學たる歌論を研究せんとするもの少し或人曰く詩歌學は詩歌の發達に益する所なし従つて詩歌學の一部たる歌論も和歌の發達を妨ぐるものなり詩歌は自然の發達に任すべきものなりと念ふに此の如きの言をなすものは從來の歌論の僻見多く徒に和歌の發達を害せしを見て説をなすものにあらざるか余が云ふ日本和歌の發達を益せんとする 歌論は今より研究せむとするものなり或は從來の歌學歌論なるものは和歌の發達を害し何等の益なかりしものなるやも知るべからず現在を知らむと欲するものは先づ過去を知らざるべからず從來日本歌學者は如何なる点に僻見を有し又彼等の歌論は如何なる所に欠点を存せしかを知りて始めて始めて歌論を談すべし余の歌道の變遷を研究したる全く此の目的に

外からざるなり然れども茲に一言せざるべからざるは神代より今日迄連綿たりし 三十一文字の短歌は果して將來に於て其の生命を保つべきものなるや否やは斷言する所にあらず 三十一文字は日本詩歌の形として現代に適せざるものならば直に廢すべし又存すべきものならば宜しく其の形を保つべし只余の主張せんとする所は苟も此の如き論をなさんとするものは先づ從來に於ける歌道の變遷を根本的に研究し然る後始めて將來を説くべし徒に輕忽の言を弄し却て世人を惑はし詩歌の發達を害するが如きは甚しき僻事とや謂つべし余本論に於て時代を分て三期とせり第一期とは古今集の序より東常縁に至る第二期は宗祇より戸田茂睡に至る第三期は以後明治に至るの間なり何故にかく分らたるかは各期に於て詳細に述べべし

第一期

第一章 第一期の特質

余が本論に述ぶる第一期には政治上の大變遷ありて王朝時代より武門政治に移るの國史未曾有の時變あり又文學史上より見れば平安朝の女流によりて成れる樂天的文學と鎌倉時代の桑門によりて成れる悲觀的文學との一大變遷をなせり然れども歌道の上に著しき變遷を見ず公任俊賴基俊は 歌學の宗匠として歌人間に尊崇せられ定家に至り先輩の諸説を稍々組織的に形式を立てこれを子孫に傳へたるのみ第一期の特質としては

- 一 第一期の歌學は支那の詩論の影響を受くること大なり
- 一 第一期の歌學は佛教陰陽五行説の影響をも受けしが詩論に比すれば極めて僅なり

- 一 第一期の歌學は非常に廣き意味なり歌論は勿論國語學に關する凡ての事項をも含めり
- 一 第一期の歌學書は徳川時代のものゝ如く一つの學説を陳べたるものにあらず歌に關する偶然の出來事並

に歌に關する習慣を隨筆風に記載せしもの多し

一 歌道傳授は定家以前にはあらざりしが如し定家の子孫二條冷泉と分れ相争ひしより歌道の秘傳など唱ひて嚴しき制規を設けて容易に他をして窺ひ知る能はざらしめしなり

第二 章 歌學者並書名

一 紀 貫之(一五四二——一六〇六)古今和歌集序

二 藤原公任(一六二七——一七〇一)

和歌九品

新撰髓腦

三 源 俊賴(一七五一——)

(無名抄)

莫傳抄

四 藤原基俊(一七二五——)

(悅目抄)

五 藤原範兼()

(和歌童蒙抄)

六 藤原清輔()

一八三七)奧儀抄

袋草紙

初學抄

七 釋 顯照()

(袖中抄)

八 釋 西行()

一八五八)西公談抄

九藤原俊成(一七七三——一八六四)和歌肝要

古來風體抄

十鴨 長明(一八二三——一八七六)無名抄

瑩玉集

十一藤原定家(一八一七——一九〇二)

和歌式、西風體抄、

和歌庭訓、

詠歌大概、

承元抄、

定家物語、

愚見抄、

僻案抄、

近代秀歌、

未來記、

雨中吟、

三五記、

桐火桶、

愚秘抄

十二藤原家隆(一八一九——一八九七)和歌口傳

十三後鳥羽院(一八四〇——一八九九)御鳥院口傳

十四順德院(一八五七——一九〇二)八雲御抄

十五藤原爲家(一八五七——一九三五)八雲口傳

十六阿佛尼(阿佛口傳)

十七冷泉爲顯(竹園抄)

十八釋頼阿(一九五二——二〇三五)井蛙抄

井蛙抄脫漏

水蛙眼目

愚問賢注

十九二條良基(一九八〇——二〇四八)近來風體

筑波問答

二十今川貞世(一九八五——二〇八〇)

言塵集、師說自見抄、辯要抄

和歌不審條々、落書露顯、

廿一藤原長親(——二〇八九)耕雲口傳

廿二釋正徹(二〇四〇——二二一八)

徹書記物語 清巖茶話

廿三釋 堯孝(二〇五一——二二一八)桂明抄

廿四一條兼良(二〇五六——二二三三)

歌材良材 和歌題林抄 古今童蒙抄

廿五釋心敬(二〇六七——二二三六)

心敬さゝめ言、心敬僧都庭訓、心敬僧都ひとり言、老のくり言

廿六東常縁(二〇六一——二二一五四)東野洲聞書

廿七猪苗代兼載(二二三〇——二二五八)兼載雜誌

廿八釋宗祇(二〇八一——二二六一)

袖の下、吾妻問答、老のすさみ

以上は余が本論を草するに當り涉獵せし重なるもの尙數多かるべし而して茲に列舉したる書名中後人の僞作により成れるものなきにあらず此等の信僞を一々判せんには専門的研究として多くの年月を費さるべからず群書類從等に考證あるも其の一部分のみ故に暫く從來傳ふるまゝを列舉して他日の研究を期す

第三章 第一期歌學者の和歌分類法

第一期歌學史上に於て主として論せざるべからざるもの一を和歌の分類法なりとす、

其一 和歌の内容方面よりの分類

(イ)古今和歌集序の六義

そも歌のさま六つなりからうたにもかくぞあるべき その六種の一にはそへうたたはささゞの御門をそへたてまつるうた

難波津にさくやこの花冬ごもり

今を春べとさくやこの花

二つにはかぞへ歌

さく花に思ひつく身のあぢきなき

、身にいたつきのいるもしらすて

三つにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のたきていなば

戀しきことにきわや渡らば

四つにはたとへうた

我戀はよむともつきじありそ海の

濱のまさごはよみつくすとも

五つにはたゞことうた

いつはりのなき世なりせばいかばかり

人の言葉のうれしからまし

六つにはいはひうた

このものはうべもとみけりささくさの

みつばよつばにとのつくりけり

此の分類は詩經の六義を眞似たるものなることは明なり抑々六義の説たる支那詩の全般をかく分類したるにあらすして單に詩經のみに就きてなしたるが故に未だ支那詩の完全なる分類法といふべからず又六義に分類すと雖辭の上よりいへば、三義なり賦比興は詩の體裁上の區別のみ六義とは毛詩の序に「詩有六義焉一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰推六曰頌」

古今集序歌の六義は詩の六義に摸したるものにして添へ歌は風に數へ歌は雅に擬へ歌は頌に將た 譬へ歌を興にたゞこと歌を賦に祝ひ歌を比に喩へたるものなり畢竟強ひて我が和歌を詩の分類法によりて分たんとしたるものあれば全適合すべきものならず固より完全なる抒情詩の分類法にあらざるや明なり

(四) 公任の九品和歌

(ロ) 公任の九品和歌

上品上 これは言葉妙にしてあまりの心さへあるなり

ほのくゞと明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ

上品中 ほごうるはしくあまりの心あるなり

み山には霞ふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけり

上品下 心深からねども面白しき所あるなり

世の中にたわて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

中品上 心詞どごこほらずして面白きなり

たちどまりみてを渡らんもみち葉は雨どふるとも水はまさらし

中品中 すぐれたることなくわろき所もなくあるべき様を知りたるものなり

春きぬと人はいへ共うくひすのなかぬ限はあらしとぞ思ふ

中品下 すこし思ひたる所あるなり

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風そ吹く

下品上 わずかに一ふしあるなり

吹からに野邊の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらん

下品中 事のころ無下に知らむにあらず

我こまははやゆきこせ松浦山まつらん妹をゆきてはや見む

下品下 ところほりてたかじき所なきなり

よの中のうちきたひ毎に身をなげばひとひと千度我やしにせん

佛教に九品あり詩話に詩の九品あり又書にもあり先つ此等如何なるものなるかを説かん

第一佛教の九品

九品往生妙經曰

上品上 上生一發三種心願生彼國
中生一深信因果不謗不乘
下生一亦信不謗發生求生

中品中 上生一受持齋戒無諸過惡
中生一一日一夜齋戒威儀不飲
下生一孝養父母行世仁慈

下品下 上生一作惡謗經臨終稱佛
中生一犯戒偷盜終闍佛法
下生一五逆十惡臨終十念

第二 詩の九品は〔梅花無盡藏六〕答仲華丈六篇詩序の中に

又詩之品有九曰高曰古曰深曰遠曰長曰雄渾曰馳逸曰悲壯曰凄婉

第三 書の九品は梁の庾肩吾の著書品〔漢魏叢書六十八續百川學海壬集〕の中に

王羲之外五人

上之上

王献之外九人

上之中

梁鹄孟皇外十七人

上之下

(以下畧す)

詩の九品は次の和歌の分類法十體十八體などに最も關係を有するものにして公任の九品和歌には直接の關係なきが如し而して佛敎の支那に入りしは後漢の明帝の八年(垂仁天皇の九十四年)にして書の九品など云ふことも佛敎の九品説より出でたるものならざるか又當時平安朝は佛敎漸く盛にして社會の各方面に其の影響を及ぼせし時代なれば公任の和歌九品も必ずや佛敎の九品に擬したるものなるべし

(ハ)和歌の十體、十八體、四十八體、六十四體

三五記

- 第一 幽玄體 わびぬれば今はたねなじにはなる身を盡しても逢はんとぞ思ふ
- 第二 長高體 思ふことなどどふ人のなかるらんあふけは空に月をさやけき
- 第三 有心體 花みてはいとゞ家路をいそかれぬ待らんと思ふ人しなけれご
- 第四 麗體 ほのくゝと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしを思ふ
- 第五 事可然體 太方の秋のねざめの長き夜も君をを祈る身を思ふとて
- 第六 面白體 山里にあからさまなる都人さびしとやみん住みうからねご
- 第七 濃體 散らすなよ篠の葉草のかりにても露かゝるべき袖の上かは
- 第八 見樣體 村雨の露もまたひぬまきの葉にきりたちのほる秋の夕暮

第九 有節體 立かへりまたも來てみん松島やをじまのこまや波にあらすな

第十 挫鬼體 ぬれてほす玉くしの葉の露の間にあまてる光幾世經ぬらん

愚秘抄

彼の十體を本基として猶風姿あまたあるべきにやいはゆる十八體なり其の體といふは遠白、強力、存直、一興、拔群、花麗、行雲、廻雪、理世、撫民、至極、松體、竹体高山澄海、不明、物哀秀逸、十八體のものを十體によせあはせて心詞の位品を立て侍るべし中略 凡歌に四十八體ありといへ共悉くそれをわかまへ知る人もさすがにありがたくや侍らん猶四十八體をひらけば六十四體までに相分たり中々に道のさはりとなるべしとて先人もかきとめられすこそ侍るめれ

三五記愚秘抄の説は一二歌の體裁の上より名けたりと思はるゝなきにあらざれども多くは 分類の標準内容にあるが如し抑々此等十體の説たる亦詩話の影響を受けたるものなり十體の語の 詩話の書に見ゆるは我國にては文鏡秘府論を以て最初のものとす

文鏡秘府論十體

一 形似體

二 質氣體

三 情理體

四 直置體

五 彫藻體

六 映帶體

七 飛動體

八 婉轉體

九 清切體

十 清花體

和歌の十體の説は文鏡秘府論の十體説を眞似たるものにあらざるか十八體（或は佛敎の十八意妙より出でたるものか）四十八體（或は四十九星の數よりにはあらざるか）六十四體等は歌學者の思ひ出でのまゝになりしものなるべし此等の説は後世吾人が詩話より出てたるものなるを謂ふを待たず歌學者自ら彼等の著書に於て

詩話に眞似たるものなることを暗に自白せり左に一例を

愚秘抄 常にいみじき詩を心にかけて吟詠せよ詩は心高くすますものなり

蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草菴中

此の詩をぞ先人は常に高吟せられき又詩の十體を相かへて見るべきなり凡歌の十體もこれに摸じてわらび出せるにや云々

第二 和歌の形式上よりの分類

(イ)古今和歌集序 爰及人代 此風大起長歌短歌 旋頭混本之類雜體非一

(ロ)悅目抄 長歌、短歌、旋頭、混本、廻文、隱題 折句、疊句、俳諧、

(ハ)奥儀抄 和歌六體

一長歌 二短歌 三旋頭歌 四混本歌 五折句歌 六沓冠折句歌

(ニ)簾中抄

長歌 五七、五七、五七、七七、多くもすくなくも人の心に從ふ

短歌 五七七七七 三十二字なり反歌といふ

旋頭歌 三十一字の外にいま一句をそへたるなり

混本歌 三十字の中に一句なきなり

折句 句のかみごとにもじを定めてよむなり

沓冠 句ごとにかみしもにもじを定めてよむなり

以上は第一期歌學者が形式上より和歌を分類したるもの、大体なり抑々我國民か歌學上の目的ならずして形の上より和歌を分類し始めたるは萬葉集を以て第一とし萬葉集古義によるに長歌は一卷二卷三卷四卷五卷六卷八卷九卷十卷十三卷十五卷十六卷十七卷十八卷十九卷廿卷に載せられたり然れども特に長歌ある名稱は記されず唯五卷の題詞に老身重病經年辛苦及思兒歌七首とありて其の下に長一首短六首と記され十三卷の題詞に雜歌として其の下に此中長歌十六首相聞と出して其の下に此中長歌二十九首と見わたるのみなり短歌は十卷大伴宿禰家持久邇の宮より弟書持のもとへ送る歌の小序に因作三首短歌以散鬱結之緒耳と見わ家持より池主へ送る書牘に詩を出して次に短歌二首とあり廿卷に冬十一月五夜少雷起鳴云々作短歌一首としり五卷梅花の序に宜賦園梅聊成短歌と見わたり旋頭歌は五七七、五七七六句の歌なり集中多くは名目を記せり即長歌短歌旋頭歌は万葉時代の歌人が形の上より和歌を分類したるものなり下りて平安朝に入り歌學の生ずるに及び混本折句杳冠を加へ六體とせり長歌短歌旋頭歌混本歌は句數を標準とし折句杳冠は詞の修飾を標準としたるもの此の形式上より分類和歌六體は説の前九品の十体十八体の和歌分類説より稍々合理的なるも一つの分類法に二つの標準を用ゐたるが如きは誤れるものにあらずや

要するに第一期の和歌分類法は直接或は間接に佛敎詩話を根據としたるものにして完全なるものとは云がたし此等の分類法に後世の我國文學に影響を及ぼせしことなかりしか余の寡聞未だ多くを見出す能はざるも次の〔幻住庵俳諧有也無也關〕の如きは或は其の一例か

俳諧幻住庵有也無也關句發八體之事

幽玄体 人も見ぬ春や鏡のうらの梅

有心体 梅の木に猶やどり木や梅の花

無心体 くたびれて宿かる頃や藤の花

悠遠体 梅か香にのつと日の出る山路哉

風艶体 五月雨を集めて早し最上川

寓言体 さのふをも峠といひし暑さ哉

風曲体 ふり賣の雁あはれなり惠美須講

(未完)

生

論

小 松 南 川

人生問題なんて要するに閑人の閑問題だよ、靴の紐を結ぶ間さへ惜む此の生存競争の激烈な世の中で其様な閑問題に就てマゴ／＼して居てたまるものか、なる程昔から随分そんなくだぬ事を眞面目に議論したり考へたりした人はあるが、誰一人として、満足に解決して、天下の人をしてハ、一cheng程どうなづかした者とはあるまい、假令有つたとした所でそれが何れ丈の實益を國家社會に與へたか。ゴルデンノットを斷つてペルシャを征服した英雄はあるが、人生問題を解決して天下を取つた話は神武此方聞いた事がない、詩を作るより田を作れちや、當世は是だよと指で圓い物をこしらへて見せた、是が所謂實社會に立つ老成の人の意見である。イヤ、人生問題は其様な閑問題では斷じて御座らぬ、此問題は蓋し総ての問題の根本に横はる